二〇十九年度 熊本県美術家連盟主催・美術講演会

六月十五日（土）熊本県立美術館・本館 文化交流室

演題「フェルメールだけでなく、ファン・アイクも、ラファエロもカラヴァッジョも使った？秘密の技法」

《講師》井上正敏先生（美連・広報部長）

井上先生は、熊本大学教育学部を卒業され、32年間県内の中学校、高校で教鞭を取られた後、２００７年から熊本県立美術館学芸課に勤務。学芸課長も務められました。美術館在職中には、「海老原喜之助と世代会の画家たち」、「描く―静かなる闘い―」、「戦後70年記念 浜田知明のすべて」などの展覧会を企画・開催。いずれも、緻密に構成された説得力のある展覧会でした。また、旧制御船中学の美術教師で、井手宣通、佐久間修、浜田知明等の才能を見つけ伸ばしていった富田至誠の調査・研究なども続けられ、その視点のユニークさには定評があります。２０１７年に美術館を退職された後は、熊本地震で被災した富田至誠の弟子の田中憲一氏の作品のレスキュー活動に専念。作品を救うためボランティア団体を結成、理事をされ、２０１９年秋には、地震以来の活動報告として、被災作品を公開修復する「絵のお医者さんがやって来た―岩井希久子・熊本地震被災作品・公開修復展―」を開催、年末の読売新聞で国内の「今年の展覧会ベスト４」に選ばれました。

今回の講演では、ルネサンスの画家たちも用いた秘密の技法を、たくさんの映像を用いて具体的に話されました。私たちの美術鑑賞や制作活動に一つの示唆を与えるもので、とても興味深いお話でした。

＊　＊

昨今、具象画を描く人はほとんどの人が写真を参考にされているのではないでしょうか。また、写真のように描いた作品が世の中を賑わせていますので、今回の話がみなさんの何かの参考になればと思いこのテーマにしました。ルネサンス以来、多くの画家たちが利用した絵画技法、しかしほとんど知られていない技法についてお話いたします。それはカメラ(映像)を使った技法です。

17世紀のオランダの画家フェルメールがカメラを使って描いたという話は有名ですし、作品をみるとそれは納得できます。しかし私は、フェルメールと同時代の他の画家たちはカメラを使わなかったのだろうかと思っていました。昨年、オランダにフェルメールの作品を見に行こうとして改めてフェルメールを調べ始めたら、イギリスの現代画家ＤａｖｉｄＨｏｃｋｎｅｙ(デイヴィッド・ホックニー／１９３７～)が書いた『Ｓｅｃｒｅｔ Ｋｎｏｗｌｅｄｇｅ』という本があるのを知りました。早速、取り寄せて読んでみて、驚きました。その後、「プラド美術館展」のベラスケスを見に行ったり、イタリア各地のカラヴァッジョの作品を見て廻ったりして、ホックニーの仮説を確かめました。

これから、この本にホックニーが書いていることを紹介します。

フェルメール（１６３２～１６７５）は「カメラ・オブスクラ」という装置を使って絵を描きました。暗い箱に小さな穴をあけてそこにレンズを置いて、反対側に映し出した映像の形をなぞり、映

し出された光学的な光や色を絵に表そうとしています。この原理は、古くから知られていて、家の中を暗くして小さい穴を通して入ってくる映像を反対側の壁に置いたパネルに映し、形をなぞって描く方法が知られていました。この逆さに映る現象は、日本でも北斎の富岳百景の《さい穴（節穴）の不二》（１８３４）にも描かれています。もっと古くは、レオナルド・ダ・ヴィンチの「アトランティスコ手稿」（１４９０頃）にこの原理が描かれています。カメラ・オブスクラを用いた画家としては、イタリアのカナレット（１６９７～１７６８）も有名です。彼の風景画は、現在でもベネツィアの絵葉書として使えそうな絵です。ロンドンには、カナレットが使ったカメラが残されています。

資料として配布したのは、ホックニーが描いた映像と絵画の関係を示す模式図です。一般に、カメラの出現は１８３９年、フランスのルイ・ダゲールがダゲレオタイプを発明してからだと言われています。が、それは画像をガラスや印刷紙に定着する薬品が完成したということ、つまり、映像をプリントできるようになったということです。実は、前述したようにそれ以前に多くの画家が、レンズと鏡を使って得た映像をもとに、「本物らしい」作品を描いてきました。その始まりは１４３０年代で、以来画家は一貫して光学的な映像を手本にして絵画を制作してきたとホックニーは主張しています。

写真が完成してプリントができると、ドガのように写真を見て絵を描く画家が出てきますが、次の世代の印象派の画家たちは、カメラに頼らず自分の目で見て描くようになりました。

ホックニーには絵画だけでなく、《ヘンリー・ムーア》のようなポラロイド・コラージュ作品があります（これは、フランドルの画家の祭壇画と似た画面構成になっています）。他にも写真を使っていろいろな表現の工夫をしています。このことが、この秘密の技法の発見の基になっていると思います。彼は１９９９年、ロンドンのナショナル・ギャラリーで「アングルの肖像画展」を見て、気づいたことがありました。それは、素描がどれも等しく小さいサイズの紙に描かれていて、顔の描写は不思議なくらい正確なのに、体や服の描写などは雑というか、映像をなぞったウォーホルの線と同じで、しかも、どれも短時間に素早く描かれている。それで、ホックニーは、アングル（１７８０～１８６７）は何かの装置を使って描いたに違いないと考え、調べたら「カメラ・ルシーダ」というものが当時発売されていたことを知りました。そこで、彼はそれを使い１年間に数百枚のもの肖像画を描きました。その結果、映像を利用して描いた絵画の特徴に気づくようになり、さらにコンピュータで、世界各地の美術館にある名画の画像を入手して印刷し、カルフォルニアのアトリエの壁にその絵を地域と制作年代を考えて貼り出しました。それは長さが20ｍにもなりましたが、これを作ったことでほぼ５００年間の西洋美術史を網羅し通観することができるようになったのです。彼はこの壁を見て、フェルメール以前にもカメラ・オブスクラを用いた画家がいなかったのかを捜したら、これまで気付かなかった多くのことを発見しました。先ず、衣服の表現が目につくようになり、明らかに目で見て衣服を描いたジョット（１２６７～１３３７）やクラナッハ（１４７２～１５５３）の作品と１５５３年や１５６０年のイタリアのジョバンニ・モローニ（１５２０～１５７８）の作品を比べると、モローニは何らかの新しい道具を使わないと描けないような表現になっているのを見つけたのです。

１４２０年代終りから１４３０年代初めにかけて、フランドル地方で突然に極めてリアルな写実表現が現れました。これは新しい技術が発見されたからに違いない。でないと、このような大きな変化は起きない。その代表がヤン・ファン・アイク（１３９０～１４４１）である。彼の《アルノルフィニ夫妻》（１４３４）をよく観察すると、天井のシャンデリアは正面から描かれ、下描きの線もなく、描き直しの跡もない。中央には凸面鏡が描かれている。凸面鏡が作れるならば、凹面鏡は簡単に作ることができる。凹面鏡で反射した映像は、レンズを使った時と同じように平面に映像を映すことができる。このことから、ホックニーは、ファン・アイクは、凹面鏡を使って映像を手に入れたのだ、と考えました。実際にホックニーも、友人に明るい外光のもとでモデルになってもらい、自分は壁がある部屋を作ってのぞき穴から入った像を凹面鏡で暗い壁に映しだし、そこに用紙を置いて鉛筆で大まかなあたりを描き、それをもとにモデルを直接見て描きこむというファン・アイクがやったと思われる作業を行い、その過程と描かれた絵をこの本に載せています。

この方法を効果的に使ったのはカラヴァッジョ（１５７１～１６１０）です。非常に有名な画家であるのに素描が１点も残っていません。モデルにポーズを取らせて、直接キャンバスに映像を投影して、筆でなぞったからでしょう。彼のコントラストの強い明暗法も、明確な映像を得るために強い光が必要だったからです。カラヴァッジョの迫真的な描写と演劇の舞台を見るようなドラマチックな構成は、現代のデザイナーがフォトショップで人物の姿を切り取り、画面にコラージュしていくのに似ています。また、初期の作品《バッカス》（１５９６-９７）は、レンズを使って左右反転したままを描いているのではないでしょうか？バッカスが左利きでややぎこちないように見えます。美しい《果物籠》（１５９８-９９）は、不思議なことに籠を正面から描いています。ファン・アイクのシャンデリアと同じで、鏡を使って描けば正面からの像を描くことになるからです。

カラヴァッジョの絵は、イタリアだけでなくヨーロッパ中に衝撃を与え、多くの追随者を生みました。それらの作品が、イタリアの美術館では、カラヴァッジョの作品の近くに沢山展示してあります。映像を使っているので非常に写実的に描いていますが、迫真性という点では全くカラヴァッジョと異なります。カラヴァッジョを見ると、それらの作品は輝きを止めてしまうのです。カラヴァッジョには（アングルもそうですが）、天性ともいえる素晴らしい描写力があるからです。

映像を使わなかった画家もいます。ボス、ブリューゲル、クラナッハ、ミケランジェロ、ルーベンス、レンブラント等々です。

ホックニーによる仮説（多くの画家が使った秘密の技法）を紹介しましたが、技法が分かればいい作品が描けるかと言えば、そうではありません。どうしたらいい作品が描けるか、それはとても難しい。どうすれば見る人の心に残る作品になるのでしょうか。イギリスの画家ルシアン・フロイドが描いた《ホックニー》（２００２）という小さな油彩画があります。フロイドはホックニーを１２０時間も写生して、出来上がったそうです。この作品を見ると１２０時間の両者の対決がこの中に積み重なっているように思えます。つまり、描いた時間は絵に積み重なって、ごまかせないものとして残り、それがこの作品を忘れられない絵にしているのではないでしょうか。

もう一つ、この作品は大英博物館にある小さな紙にインクとペンで描かれたレンブラントの素描です。これを見ると、よちよち歩きの女の子を姉と母親が手をつなぎ、その前に「こっちへおいで」と手を差し出している父親がいます。わずかなインクの跡で、この４人家族の一人ひとりの表情や気持ちまで伝わってきます。そこに通りかかった牛乳桶を抱えた娘が素早い数本の線で描かれ、牛乳の量までわかるようです。この情景は写真では無理でしょう。ちょっとしたことでも、見たものや考えたことを手で紙に表わす素描を続けていく。素描とかデッサンという習慣。この日々の習慣の積み重ねが、このような心のこもった作品、見る人を感動させる素晴らしい作品を生み出すのではないでしょうか。iPadで絵を描くようになった現代でも、これからも、素描の習慣の大切さは変わらないと思います。ご清聴ありがとうございました。